

# 学館連携事業におけるロココ時代の髪型の試着用ヘアークツラの制作方法と工夫（1）：ウェーブ構成

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-01-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 真殿, 由加里 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/2000054">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/2000054</a>

# 学館連携事業におけるロココ時代の髪型の試着用ヘアカツラの制作方法と工夫 (1)

## —ウェーブ構成—

学芸学部 化粧ファッション学科 真殿由加里

**要旨：**本研究は、大阪樟蔭女子大学と神戸ファッション美術館の学館連携事業における美容分野の取り組みとして、ロココ時代のトータルファッションとしての装いの実現と一般・来館者が当時の衣生活を追体験できる機会の提供を目的に、平成 26 (2016) 年度学館連携事業の成果物である試着用ローブ・ア・ラ・フランセーズと共に装う当時の宮廷女性の髪型の試着用ヘアカツラ (ウェーブ構成) の制作方法を検討した。真殿 (2018) 『ロココ時代の試着用ヘアカツラ制作に使用する材料の検討』の成果として報告した材料を使用し、制作においては、ロココ時代の巨大な髪型を再現するとともに、耐久性と持続性に優れ、軽量で重心が安定するように工夫を施し、安全性にも配慮した。その結果、歴史的髪型を試着可能なヘアカツラとして表現する 1 つの制作方法を提示することができ、制作したヘアカツラとローブと共に装うことで、トータルファッションであるからこそその「美」の実現と、当時の衣生活の一端を追体験できる機会を提供できた。また、試着用ヘアカツラの制作を通して、西洋服飾史における美容文化への理解が深まり、ヘアモードが時代を支配した当時の結髪師の存在意義や重要性を考察することができた。

**キーワード：**学館連携事業、ロココ、ヘアカツラ、髪型、制作、結髪師

### 1. はじめに

大阪樟蔭女子大学と神戸ファッション美術館との学館連携事業の取り組みとして、これまで神戸ファッション美術館が収蔵する歴史衣装のレプリカを数多く制作してきた。その一つに、18 世紀フランスの宮廷衣装であるローブ・ア・ラ・フランセーズ (収蔵品番号 2-FR-03-F1-9-1・2) の着装の追体験を可能とした試着用ローブ (レプリカ) と試着用パニエ (レプリカ) がある。本研究は、学館連携事業において試着用ローブと試着用パニエを制作したことに伴い、トータルファッションとしての装いの実現と一般・来館者が当時の衣生活を追体験できる機会の提供を目的に、試着用ローブと共に装うための試着用ヘアカツラ (ウェーブ構成) の制作方法を検討する。

ロココ時代のトータルファッションの「美」の実現および当時の衣生活の一端を追体験するためには、当時の巨大な髪型は無くしてはならないものである。ロココ時代は、ヘアモードが流行を支配する時代といわれ、ロココを代表する髪型といえば、驚異的で巨大な髪型である。ロココ時代に髪型が巨大化していった背景には、左右の腰に張り出したパニエやドレス、派手な装

飾の衣装が関連して、衣装と髪型のバランスが考えられて髪型が巨大化していったといわれている。ロココ時代の装いは、横広りのパニエをつけた巨大なドレスと、巨大な髪型とのトータルバランスがとれてこそ、ロココ時代のトータルファッションの「美」が成り立つのである。

ロココ時代の巨大な髪型の試着用ヘアカツラを制作するには、当時の結髪師が使用していた材料や手法を用いるのではなく、新たな材料および手法を用いて制作する必要がある。本研究で制作する試着用ヘアカツラは、一般の方や来館者を対象とした不特定多数の人が試着可能であり、着脱を繰り返しても髪型が崩れないよう耐久性と持続性に優れ、軽量で重心が安定し、安全に配慮したものでなくてはならない。当時、ロココ時代のフランス宮廷女性の髪型は、結髪師が巨大な髪型を結うためにクッションなどを使用して驚異的で巨大な髪型を結っていた。しかし、当時の手法では、耐久性や持続性に優れているとはいえない。また、現代で髪を結うときに使用されている毛束や髷類などの結髪用具だけではヘアカツラの耐久性や持続性に欠けることから、ロココ時代の髪型の試着用のへ

アーカツラの制作においては、新たな材料および手法を用いて制作する必要がある。本研究は、真殿（2018）『ロココ時代の試着用ヘアカツラ制作に使用する材料の検討』の成果として報告した材料を使用し、不特定多数の人が試着可能で、着脱を繰り返しても髪型が崩れないよう耐久性と持続性に優れ、軽量で重心が安定し、安全に配慮した試着用ヘアカツラの制作を試みるものである。

## 2. ヘアカツラのデザイン

制作するロココ時代の髪型の試着用ヘアカツラのデザインは、マリー・アントワネットの肖像画を多数手がけていた画家ヴィジェ・ルブランの作品から有名な絵画（図1）に描かれたマリー・アントワネットの髪型を参考にデザインを検討した。マリー・アントワネットは、フランス国王ルイ16世の王妃で、フランス王太子妃に迎えられたルイ16世代には、マリー・アントワネットがモードのリーダーとなり、ロココ時代の髪型を巨大化していったといわれている。その当時、マリー・アントワネットの髪型を結っていたのが結髪師のレオナルド・オーティエである。結髪師のレオナルド・オーティエは、マリー・アントワネットに独創的で魅惑的な巨大な髪型を数多く結び、ヘアモードが流行を支配する時代を築き上げた一人となった。



図1 マリーアントワネット肖像画

Elisabeth-Louise Vigée-Le Brun 1755-1842

制作するヘアカツラのデザインは、絵画の髪型をもとに、ヘアカツラの着脱のしやすさや髪型の耐久性や持続性などを考慮し、肩まである巻き髪スタイルを、顎ラインまでの巻き髪スタイルのデザインとした。肩にかかる巻き髪は、ヘアカツラの着脱時に身体との接触が繰り返されることで、巻き髪部分のカーブの形状を維持することが困難と考えた。

巻き髪部分以外については、髪型の耐久性や持続性などを考慮し、結び上げるスタイルとして肖像画の髪型の再現を試みた。シルエットやウェーブの形状を維持しながら、毛先を結び上げてまとめることにより、髪型のシルエットやウェーブの形状の持続性が向上すると考えた。

## 3. ヘアカツラの材料

試着用ヘアカツラの材料は、真殿（2018）『ロココ時代の試着用ヘアカツラ制作に使用する材料の検討』の成果として報告した三善の坊主をカツラ下地に、ミナフォームマルマル（巻きタイプ）の緩衝材を土台に、ネクステンションクリスタル（みの毛タイプ）の人工毛を使用した。三善の坊主のサイズは、男性女性問わず不特定多数の方が試着可能となるよう No.1 の大きいサイズを選定した。ミナフォームマルマルのサイズは、髪型の高さを出しながら土台として安定性を保つことを重視し、20サイズを選定した。人工毛は、当時使用されていた髪粉を再現するために白色に近い色を選定し、長さは巨大な髪型を結えるよう XXL サイズを選定した。新たに選定した材料は、付属の毛髪部分で使用する土台に、水道配管の保温・保冷カバーのポリエチレン発泡体のカプセル（背割品）を選定した。選定理由は、素材が軽く、操作性と形状がよかったためである。

## 4. カツラ下地の制作

カツラ下地は、三善の坊主（サイズ：No.1）のフロント部分を一部切り取って制作した。三善の坊主は、生え際が特に薄く作られており、フロント部分の生え際が薄くなっていることから、緩みやたるみが生じる可能性があるため、フロント部分の生え際を一部切り取ることで、素材の厚みを安定させた。カツラ下地の



図2 カツラ下地  
(切り取り前)



図3 カツラ下地  
(切り取り後)

正中線上をマーカーでラインを引き、フロントから1cmの所が生え際になるよう丸くラインを取って(図2)ハサミで切り取ったら、カツラ下地の完成である(図3)。

### 5. カツラ下地に接着する人工毛の制作

カツラ下地に接着する人工毛の制作は、カツラ下地のアウトラインを伸縮性のある白色の生地で型取りを行い(図4)、生地の型(図5)から2cm幅の範囲に人工毛をボンドで接着して制作した。カツラ下地は立体のゴム製であることから、使用する生地は、カツラ下地に沿いやすく接着できる伸縮性のある生地で、生地の色は髪粉を表現するために選定した人工毛の白色に近い色を選定した。生地の型取りは、カツラ下地の下に生地を敷き、カツラ下地のアウトラインに沿ってマーカーでラインを引き(図4)、ラインに合わせてハサミで生地をカットしていった(図5)。



図4 型取りの様子



図5 フェイスラインと  
ネーブラインの型

本制作は、ウェーブ構成の髪型であるため、カツラ下地に接着する人工毛はウェーブ状にする必要がある。ネクステンションクリスタル(XXLサイズ)の人工毛(みの毛タイプ)を広げ、毛束の上部が縫われている部分を約1.5cm幅ずつ分け取り、分け取った人工毛にカールセットローションを全体に塗布して、12mmのロッドを縦巻きで1本ずつ右巻き左巻きを交互にワインディングを行っていった(図6)。カールセットローションを使用することで、人工毛のウェーブ状をより維持することができる。XXLサイズの人工毛は長さがあるため、12mmのロッドを上から下に巻き付けた後、下から上に巻き収めていく必要がある。ワインディングを行う際は、人工毛の縫われている部分にクリップを取り付け、クリップを壁などのフックに引っかけて安定させた。ワインディング終了後には、

ロッドに巻き付けた人工毛に、カールセットローションをさらに全体に満遍なく塗布し、塗布後は2日間ほど放置し、カールセットローションが乾くのを待つ。



図6 人工毛にワインディングを施した状態

次に、型取った生地のアウトラインに対して人工毛の根元側の毛が直角になるように、人工毛をボンドで接着していく(図7)。ワインディング終了後のセットローションが乾いた人工毛を、ロッド1本ずつ上部の縫われて繋がっている部分をハサミで切り取り、生地の型の上にボンドを付けてその上に切り取った人工毛の根本側2cmを生地の型に直角になるように置き、爪楊枝を使いながらボンドを人工毛と生地になじませていく。ボンドが人工毛と生地になじんだら、人工毛の上にビニールをかぶせ、その上に重石を置き、人工毛の厚みを均等にしながら断面を平らにして、定着させていく。人工毛を接着したボンドが乾いてから次の人工毛を接着していくため、この作業工程は時間(日数)を要する。接着する箇所によっては、ロッドに巻き込んだ人工毛を数cmロッドアウトすることで、ロッドが邪魔にならず接着しやすくなる。



図7 ワインディング後の人工毛を型に接着した状態

型取った生地のアウトラインに接着した人工毛のボンドが全て乾いたら、生地の型のアウトラインから2cm幅をハサミで切り取り、切り取った断面に爪楊枝を使いながらボンドを塗布する。切り取った断面をボンドで固めることで、生地の型に接着した人工毛が外れにくくなる。断面のボンドが乾いたらカツラ下地

に接着する人工毛の完成である。

## 6. 付属の毛髪部分の制作

ヘアカツラのデザインは、巻き髪部分を顎ラインに設定し、巻き髪部分を付属の毛髪部分として制作した。付属の毛髪部分の土台は、ポリエチレン発泡体のカプセル（背割品）を電熱線カッターで11cm幅にカットし、背割と並行に背割から3cm幅をカットする。付属の毛髪部分の土台であるセブセルに接着する人工毛の制作は、「5. カツラ下地に接着する人工毛の制作」と同様に行う。伸縮性のある白色の生地をカプセルの11cm幅に合わせて生地を型をつくる。生地の上にボンドを塗布し、その上に切り取った人工毛の根本側2cmを生地の型に直角になるように置き、爪楊枝を使いながらボンドを人工毛と生地になじませていく。ボンドが人工毛と生地になじんだら、人工毛の上にビニールをかぶせ、その上に重石を置き、ボンドが乾くまで数日待つ。ボンドが乾いたら、生地型の11cmのラインから1.5cm幅をハサミで切り取り、切り取った断面に爪楊枝を使いながらボンドを塗布し、ボンドが乾いたら付属の毛髪部分の土台であるカプセルに接着する人工毛の完成である。

次に、カプセルに接着する人工毛をカプセルの背割の中に入れて、カプセルの背割り部分の内側に人工毛を接着した生地11cm×1.5cm幅分をグルーガンで接着する（図8）。そして、カプセルの両端に人工毛がはみ出さないようにカプセルの外縁にUピンを6本ほど挿し、人工毛をカプセルに巻き付けていく。巻き付けていく際に、カプセルの土台が見えないように人工毛の量を均等に配分しながら、ウェーブ状にした人工毛のウェーブが緩みすぎないように注意し、ハードスプレーでウェーブの形状を固定しながら巻き付けていく。カプセルに人工毛を1周巻き付けられたら、巻き終わり箇所から3cmほど先にクリップを留める（図9）。クリップの手前の人工毛を、一直線上にボンドを塗布し、爪楊枝でなじませて、ボンドが乾くまで待つ。その後、クリップを外し、一直線上に付けたボンドの箇所を、リングコームのテールを使い、背割の中に入れ込む。入れ込んだ人工毛と背割の内側部分に、グルーガンを塗布して固定する。その後、カプセルの切れ目にグルーガンを塗布し、隙間3cmを指で押して塞ぐ。これらの作業工程を繰り返して行い、付属の毛髪部分の土台を4つ制作する。

次に、付属の毛髪部分の土台の円形の側面に接着する人工毛を制作する。人工毛の毛束の上部が縫われて



図8 カプセルに人工毛を接着



図9 クリップ留め

いる部分を3cm幅程度で切り取り、切り取った先をゴムで束ね、束ねたゴムから1.5cmほど上のところで人工毛を切り揃える。切り揃えた先にボンドを塗布し、爪楊枝でなじませる。ボンドが固まったらゴムの周りに瞬間接着剤を塗布して固定し、人工毛の毛束をつくる（図10）。毛束の先にクリップを取り付け、クリップを壁などのフックに引っかけて安定させ、人工毛の毛束を2つに分け、人工毛にカールセットローションを塗布し、10mmのロッドを縦巻きで同方向にワインディングを行う（図11）。ワインディング終了後には、ロッドに巻き付けた人工毛に、カールセットローションをさらに全体に満遍なく塗布する。塗布後は2日間ほど置き、カールセットローションが乾くのを待つ。カールセットローションが乾いたら、ロッドアウトを行い、コーミングして人工毛をなじませる。人工毛の毛束のゴム側を中心に、カプセルの直径の大きさまで人工毛を円形状に巻き付けていき、ダブルピンで固定していく（図12）。形が整ったら、円形状の人工毛にカールセットローションを満遍なく塗布して、乾くのを待つ。人工毛が乾いたらダブルピンを取り除き、毛先を毛束のゴム側の円形状の中に収めてカットし、カットした毛先にボンドを塗布してなじませながら円形状に形を整えていく。ボンドが乾いたら付属の毛髪部分の土台の円形の側面に装着する人工毛の完成である。これらの作業工程を繰り返して行い、付属の毛髪部分の土台の円形の側面に接着する人工毛を8つ制作する。



図10 人工毛の毛束



図11 ワインディング後

次に、円形の側面に装着する人工毛を、付属の毛髪部分の土台に接着していく。付属の毛髪部分の土台の円形部分の側面にボンドを塗り、制作した円形の人工毛を乗せて接着し、ボンドが乾くまで待つ。この作業工程を、4つの付属の毛髪部分の土台の円形側面の両側に行い、付属の毛髪部分のパーツが4つ完成する。

次に、付属の毛髪部分のパーツを2つずつ束ねていくが、円形が重ならないようにずらし、ヘアカツラ全体のバランスと、付属の毛髪部分の位置を考えて束ねる長さを決める。長さが決まったらゴムで束ねて、束ねたゴムから1cmのところまで、不要な人工毛をカットする。切り取った断面にボンドを塗布し、爪楊枝でなじませて人工毛をボンドで固め、ゴムの周りに瞬間接着剤を塗布し、固定する。残りの付属の毛髪部分のパーツ2つも同じ作業工程を繰り返し行い、2セットの付属の毛髪部分が完成である（図13）。



図12 円形状の人工毛



図13 付属の毛髪部分

## 7. カツラ下地の土台の制作

カツラ下地の土台の制作は、緩衝材のミナフォームマルマル（サイズ20）を輪にしたものを重ね合わせ、全体のバランスを取りながら重心を考え、形状を整えて制作した。最初に、カツラ下地の上からミナフォームマルマルを一巻きして、全体のバランスを見ながら重心を考えて、丁度良い位置で輪が一重になるよう長

さをカットする。カットしたミナフォームマルマルの円形の断面をグルーガンで接着し、断面同士を繋ぎ合わせて1つの輪を作る。その輪の上に、またミナフォームマルマルを一巻きして、同じように全体のバランスを見ながら重心を考え、丁度良い位置で輪が一重になるよう長さをカットし、円形の断面をグルーガンで接着して輪を作る。そして、1つ目の輪の上に2つ目の輪を重ねた輪と輪の接着面にグルーガンを塗布して接着する。この輪の積み重ねを繰り返し行い、土台を形成していく。

土台の下部の制作は、まず輪にしたミナフォームマルマルを重ね合わせて、シルエットになる土台の内面と外面を形成していく。そのなかで、カツラ下地と土台の接着面をできるだけとれるように、カツラ下地と土台の外面の隙間の空洞を、ミナフォームマルマルをはめ込みながらパーツ同士をグルーガンで接着していった（図14、図15）。ミナフォームマルマルは、全体のバランスを考え、重心の位置を頭頂部に向かうよう、時折ミナフォームマルマルを輪にせず側面を斜めに切るなどして土台を形成していった。カツラ下地と土台の接着面をできるだけ広くとることで、全体の重心が低位置になり、重みを分散させることで安定感が出ると考えた。その一方で、ミナフォームマルマルを付け足せば足すほど、グルーガンの接着剤を含め重さが増していくため、重くなりすぎないように注意する必要がある。



図14 土台作り 下部前



図15 土台作り 下部後

土台の上部の制作は、輪にしたミナフォームマルマルを1重にして重ねていき、最後はこぶし1個分の円形を開けておく（図16、図17）。こぶし1個分の円形を開けておく理由は、後に付属の毛髪部分を接着する時に、土台の中に手を入れて作業できるようにするためと、最後に結び上げた人工毛を1つにまとめて結び上げるためである。土台の上部の制作は外面のみを形成し、中を空洞にすることで、ヘアカツラの重心の

位置をなるべく低位置にもっていき、軽さを出した。また、ミナフォームマルマルを輪にした輪の中心を、なるべくヘアカツラの頭頂部に向かうよう徐々にずらしながら輪を積み重ねた。そうすることで、ヘアカツラ着用時の重心のバランスが取りやすいと考えた。



図 16 土台作り 上部前



図 17 土台作り 上部後

#### 8. 結び上げ前の作業工程と土台の最上部分の制作

結び上げを行う前に、「4. カツラ下地の制作」で制作したカツラ下地に「5. カツラ下地に接着する人工毛の制作」で制作した人工毛の生地部分をカツラ下地のアウトラインに沿って瞬間接着剤で接着し、人工毛を巻き付けていたロッドを外し（図 18）、「7. カツラ下地の土台の制作」で制作した土台を瞬間接着剤とグルーガンでカツラ下地に接着し、さらに土台が安定するようミナフォームマルマルを付け足してグルーガンで接着した（図 19：付け足し途中）。カツラ下地と土台を接着した後、カツラ下地と土台の接着面をできるだけ広くするように、ミナフォームマルマルをカツラ下地に接着した人工毛の生地端から土台に向け、カツラ下地にミナフォームマルマルを沿わせながら土台を付け足していった。カツラ下地と土台の接着面を広くすることで、全体の重心が低位置になり、より安定すると考えた。



図 18 人工毛の接着



図 19 土台の接着（途中）

次に、土台が整ったら、土台の周りに接着スプレーを吹きかけ、その上に白色の毛たぼを巻き付けて接着した（図 20）。毛たぼを巻き付けることで、シルエットの曲面がなだらかになり、人工毛をより密着させることができると考えた。

次に、土台の最上部分の中心の位置を考え、中心の位置に合うよう土台の最上部分を制作した（図 21）。土台の最上部の円形より小さめな円形の輪をミナフォームマルマルで作り、最終の結び上げの中心点を考え、中心の位置を調整するために半円状のミナフォームマルマルを付け足してグルーガンで接着し、前方側と後方側を分ける中心線上に輪ゴムをかける。輪ゴムをかけたら、パーツと輪ゴムをグルーガンで接着し固定する。



図 20 毛たぼの接着後



図 21 土台の最上部分

次に、「6. 付属の毛髪部分の制作」で制作した付属の毛髪部分を、全体のバランスを見ながら土台に装着する位置を決め、土台に接着した。土台に付属の毛髪部分の接着する位置を決めたら、その位置にカッターを使って、約 1.5cm×1.5cm の大きさの穴をあける。その穴にグルーガンを塗布し、付属の毛髪部分のゴムで留めた先をハメ込み、周辺の間隙をグルーガンで埋める。その後、付属の毛髪部分のゴムの下に U ピンを通し、土台に差し込み、土台の最上部のこぶし 1 個分の隙間から手を土台の中に入れて、4cm ほどに切ったミナフォームマルマルを、土台に刺さった U ピンの先に刺し、U ピンのピン先をねじって固定して取り付ける。ねじった U ピンの先と、U ピンに挿したミナフォームマルマルは、グルーガンで接着し、土台と付属の毛髪部分を固定する。同じ作業工程を左右対称に両サイド 2 か所に行う。付属の毛髪部分が装着できれば、土台の最上部分を土台の上部にグルーガンで接着する。

## 9. 結い上げ工程

土台の両側に接着した付属の毛髪部分を境に、後方側と前方側に分けて、先に後方側を結い上げてから前方側を結い上げた。まず、後方側の結い上げは、後方側の人工毛を三つ襟を境に、ネープ中央、ネープ右側、ネープ左側に3等分する。ネープ中央の人工毛を、土台で形成した丸みに沿わせながら土台の最上部分に向けて整えていき、最上部分の人工毛の折り返し位置でゴムを結び、人工毛の毛先を折り返して内側に入れ込み、ボリュームの位置を調整しながら毛先が表面に出てこないように整え、ゴムを最上部分のゴムに結び付ける。ネープ右側とネープ左側も同様に行っていくが、それぞれ3等分した境目が分からないように、毛流れや表面の人工毛の面の幅を考えて結う必要がある。また、付属の毛髪部分との堺についても、後から結う前方側の人工毛との繋がりを考えながら結う。後方側の結い上げが終わったら、結い上げた人工毛に満遍なくハードスプレーを吹きかけて固める。

次に、前方側の結い上げは、カツラ下地の形状を見ながら左右対称の位置に境を決めて、人工毛をトップ中央、サイド右側、サイド左側に3等分する。後方側の結い上げと同様に、前方側のサイド右側とサイド左側の人工毛を土台で形成した丸みに沿わせながら土台の最上部分に向けて整えていき、最上部分の人工毛の折り返し位置でゴムを結び、人工毛の毛先を折り返して内側に入れ込み、ボリュームの位置を調整しながら毛先が表面に出てこないように整え、ゴムを最上部分のゴムに結び付ける。最後にトップ中央も同様に結い上げるが、最上部分のゴムと最上部分に結び付けたゴムが見えないようにしながら結い上げる。前方側の結い上げが終わったら、結い上げた人工毛に満遍なくハードスプレーを吹きかけて固めて試着用ヘアカツラ（ウェーブ構成）の完成（図22、図23）である。



図22 ヘアカツラ（前）



図23 ヘアカツラ（後）

## 10. おわりに

本研究は、不特定多数の人が試着可能なヘアカツラ（ウェーブ構成）の制作方法のひとつを提示することができた。それによって、本研究の制作方法をもとに、数多くの歴史的髪型を再現した試着用ヘアカツラの制作が可能となり、歴史的衣装の展示に活用することができる。当時の結髪師は、巨大な髪型にするためにクッションなどを使用していたが、本研究においては、不特定多数の人が試着可能なヘアカツラの制作を試みたものであり、当時の材料や手法では耐久性に優れていないことから、独自の新たな材料および手法で、巨大な髪型をヘアカツラに再現することができた。土台として選定した材料（ミナフォームマルマル）は、結髪用ではないため、巨大な髪型のヘアカツラを制作していくための制作手順も一から考えて試行錯誤する必要があった。本研究で、不特定多数の人が試着可能なヘアカツラ（ウェーブ構成）の制作方法のひとつを提示できたことは一つの成果といえる。

本研究で、ロココ時代の試着用ヘアカツラを制作したことにより、試着用ローブと試着用パニエと共に装うことで、トータルファッションであるからこそその「美」と、当時の衣生活の一端を追体験することが可能となった（図24）。当時の巨大な髪型は、顎から頭頂部まで130cmに達するものもあったという。追体験を通して、巨大な髪型の重さやバランスをとることの難しさ、巨大な髪型により自然な立ち居振る舞いが制限されることなど、当時の衣生活の一端を理解することができた。また、ローブとのトータルバランスを図ることの重要性も再認識できた。



図24 ロココ時代のトータルファッションの装い



ロココ時代の装いの追体験が可能となったことにより、装いをトータルで表現することの美容分野の重要性について、より理解が深まった。人が装うことの一つに、美容の結髪があり、生きている人の髪を結うことは、瞬間的で一時的なものである。しかし、本研究では、髪型の持続性や耐久性を考えてヘアカツラ（ウェーブ構成）の制作方法を検討した。歴史的髪型を試着可能なヘアカツラとして制作することにより、当時のトータルファッションだからこそその「美」に近づけることができるアイテムの一つを提示することができた。これは、美容の分野から身体を装う行為に関する試みの一つを提示できたといえる。

ロココ時代の髪型の試着用ヘアカツラの制作を通して、西洋服飾史における美容文化への理解が深まり、当時の髪型を結っていた結髪師の存在意義などが改めて再認識できた。当時の驚異的で巨大な髪型は、結髪師の独創的な発想や職人技術がってこそ存在しえた髪型であり、だからこそヘアモードが流行を支配する時代を築くことができたといえる。その当時、現代にあるような結髪道具や結髪剤がないなかで、結髪師がはしごをに登って髪を結う風刺画が書かれるほどの、巨大な髪型を結う技術力は相当なものであったと推測する。また、巨大な髪型を結うには、最低でも4~6時間かかったという。長時間におよんで巨大な髪型を結う結髪術には、結髪師の集中力もさることながら、マリー・アントワネットはじめ王妃たちの忍耐力も相当必要であったと推測する。巨大な髪型を結うことや、巨大な髪型での生活における苦難があるにも関わらず、巨大な髪型を結う目的や意味、価値、役割などが当時の巨大な髪型にあったわけである。数多くの巨大な髪型を生み出していった当時の結髪師の存在は偉大であり、だからこそその地位と名誉と報酬を確立できたといえる。

本稿は、一般社団法人日本家政学会第70回（2018年5月25日、26日、2日：日本女子大学）において発表したポスター発表と、第23回日本顔学会大会フォーラム顔学2018（2018年9月1日、2日：明治大学）において発表したポスター発表の内容をもとに、さらに検討と考察を加えたものである。本作品は、大阪樟蔭女子大学と神戸ファッション美術館の成果の一部である。

## 謝辞

本研究の遂行にあたり、神戸ファッション美術館の浜田久仁雄氏、中村圭美氏には、多数の情報及び資料をご提供くださいました。ご協力いただきましたこと、ここに深謝の意を表します。

## 参考文献

- Jame.Stevens-Cox, 1984,『An Illustrated Dictionary of Hairdressing and Wigmaking』Batsford.
- 高山ほか, 1993,『天辺のモード』株式会社INAX.
- ポーラ文化研究所, 2003年,『華やぐ女たち〜ロココからベルエポックの化粧とよそおい〜』株式会社ポーラ印刷.
- ポーラ文化研究所, 2005年,『ヘアモードの時代』株式会社ポーラ印刷.
- ウィル・バショア, 2017,『マリーアントワネットの髪結い』株式会社原書房.
- Martha.Ruskai; Allison.Lowery, 2018,『Wig Making and Styling: A Complete Guide for Theatre & Film』Routledge.
- 公益社団法人日本理容美容教育センター, 2018,『美容技術理論 2』公益社団法人日本理容美容教育センター.
- 公益社団法人日本理容美容教育センター, 2018,『文化論』公益社団法人日本理容美容教育センター.
- 真殿、浜田、中村（2018）『学館連携事業におけるロココ時代の試着用ヘアカツラの制作』日本家政学会第70回大会 研究発表要旨集 p. 81（2018年5月26日27日：日本女子大学）
- 真殿、浜田、中村『ロココ時代の試着用ヘアカツラ制作に使用する材料の検討』日本顔学会誌 Vol. 18 2018, No 1 p. 68（2018年9月1日2日：明治大学）
- 真殿、浜田、中村『ロココ時代の髪型の試着用ヘアカツラ』日本顔学会誌 Vol. 19 2019, No 1 p. 82（2019年9月14日15日：北海道情報大学）

# **Methods and Techniques of Creation of for Hair Wigs Expressing Rococo–Era Hairstyles in a University–Museum Project (1): Wave Formation**

Faculty of Liberal Arts, Department of Beauty and Fashion Studies  
Yukari MADONO

## **Abstract**

This study is a collaborative university–museum initiative in the field of fashion aesthetics involving Osaka Shion Women’s University and Kobe Fashion Museum. The aim of this study is to realize the Rococo–era outfitting as a total fashion coordination and provide an opportunity to the general public and museum visitors to vicariously experience the clothing culture of the age. Therefore, this study examined methods for making hair wigs for participants to try out the hairstyles of court ladies of the period while wearing a robe à la française, the product of the Academic Year 2016 university–museum project, for fitting. Using the materials reported in Madono (2018) “Materials for Use in Rococo–era Hair Wigs for Fitting,” the production process involved the replication of large–scale hairstyles of the Rococo era, along with the deployment of techniques to ensure outstanding durability and longevity. The hair wigs also needed to be light in weight with a stable center of gravity and safe to wear. Therefore, we were able to present a production method to create a hair wig capable of expressing the historical hairstyle and of being fitted. By wearing both the hair wig and robe created through the above projects, participants were provided with the opportunity to vicariously experience the clothing culture of the era and to gain exposure to a form of beauty only accessible through total fashion coordination. Moreover, producing wigs for fitting instilled a deeper understanding of the culture of beauty in the context of the western fashion history and prompted consideration on the meaning and significance of the hairdresser’s presence in an age when fashion in hairstyling was a dominant expression of mode.

Keywords: University collaboration project, Rococo, Hair wig, Hairstyle, Production, Hairdresser